◆連載 いま留萌むかし

●留萌港の函塊（ケーソン）

昭和六十三年三月十八日付で、北海道開発局小樽開発建設部小樽港湾建設事務所長より、大正十年、十一年製のコンクリート供試体が五個留萌市教育委員会に寄贈された。ひょうたん型をしたこのコンクリートのちいさな固まりが留萌とどんな関わりを持つのかと考える人が多いであろう。実はこのコンクリート供試体と同じコンクリートが留萌港の南防波堤に使用されているのである。

留萌港の築港は明治四十三年（一九一〇）に始まった。それ以来、防波堤の基本をなす函塊（ケーソン）は留萌で作り、海中に沈めた。この函塊の重さは一千トンもあるものでその取扱には細心の注意が払われたという。

しかし、明治四十三年からの工事も留萌の気象条件に左右され、遅々として進まなかった。七ヵ月間の冬籠もりと季節風、それに伴う大波濤。実に一年の内五ヵ月しか稼働期間がないという難工事であった。そして、やっと工事のできる春がやってきても、冬の間に函塊（ケーソン）製作台や滑台に積もった土砂の取り除きや、留萌川河口に堆積した土砂のため水深が浅くなり、函塊（ケーソン）の運搬に支障がおき、そのために毎年工期が更に短くなるということを繰り返していた。

そこで当時小樽築港事務所長で留萌築港事務所長を兼ねていた伊藤長右衛門と留萌築港事務所の技師林千秋（第三代留萌築港事務所長）は函塊（ケーソン）を海上輸送するという前代未聞の構想を実現するに至った。つまり、函塊（ケーソン）の製作は小樽の留萌築港の分工場で行い、留萌まで五十六浬を船で曳航するというのである。

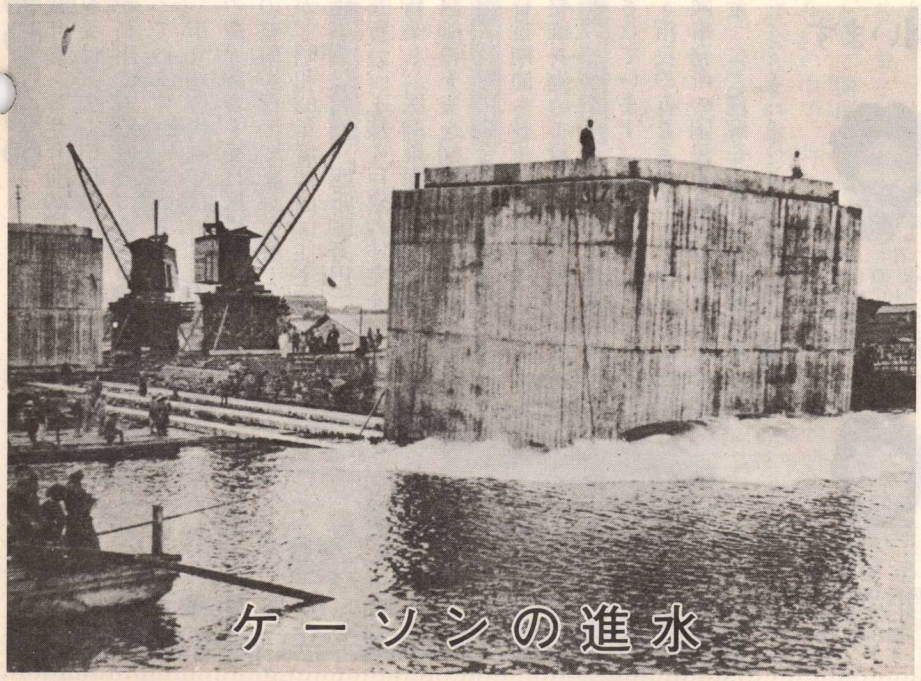
大正十一年に八個、十二年に九個を輸送し、留萌港の南防波堤に沈められた。この函塊の大きさは長さ十メートル、幅十一メートル、高さ八メートルで積量三百立方メートル、吃水は七メートルであった。

曳き船は大正十一年には駿甲丸（八五五トン九五馬力）、美津丸（七十トン二四馬力）の二隻、大正十二年は阿寒丸（百トン三五馬力）、吉浦丸（七六トン三十馬力）、鱗光丸（七一トン三一馬力）であった。小樽から石狩湾を横断し、雄冬岬をかわす航路は、途中の潮流、風向が一定せず危険を伴う航海であったようである。

この函塊（ケーソン）の海上輸送は当時としては世界にも例をみない画期的な仕事だったといえる。留萌の成功ですぐに岩内港へも小樽から函塊（ケーソン）を輸送している。

この函塊（ケーソン）を造ったコンクリートが今でも小樽に残っているという話を開発建設部に努める友人から情報を得、南防波堤に沈んでいる函塊（ケーソン）と同じコンクリートが現存するならば是非に郷土の資料として寄贈願いたいと頼んだところ、ご快諾いただき供試体を寄贈いただきました。

また一つ留萌の歴史を語る資料が増えたことは喜ばしいかぎりです。関係者に感謝いたします。



ケーソンの進水

●特集 浜中運動公園の建設進む。

昭和63年5月／発行・留萌市
編集・総務部秘書企画課
印刷・白鳥印刷株式会社

人の動き　男16,630（減262）・女17,472（減214）・合計34,102（減476）　世帯数12,770（減146）　3月末現在